命という種は、昼の世界でこそ育つ

雛節句が過ぎたというのに外は大雪なので、録り貯めのビデオから、先日のＮＨＫ教育ＴＶで再放送された「いいもんだよ、生きるって－夜回り先生－」を見た。他のＴＶ局や番組でも取り上げられ、また本も出版されているので、ご存知の方も多いと思が、宇宙で唯一つの命という大事な種は太陽のある昼間でしか育たないで、「夜の世界から帰れよ！」と既に１３年間も夜周りし続けて、子ども達にひたすら語り続ける先生の話である。

先生は、子どもたちは昼間の世界で大人（親、学校教師等）からしかられ、攻撃されて、昼の世界では心の居場所がなくなり、やむなく夜の世界に来るという。そこには金づるのために最初は優しく大事にしてくれる大人がいて、次第に薬物や体を売る道へと誘導さてしまう。

ありのままの今の自分を受けとめてくれる先生には、夜の世界で傷ついた子どもからの日に数百通の電話やメールがあり、先生はその悲痛な叫びに寄り添っている。

先生は、大人に、昼間の世界でなぜ子どもを認め、誉めないのかと問う。子どもは「誉められることで自信を持ち、生きる力を得る」という。今増えているリストカットをする子どもたちも、死にたくてリストカットしているのでなく、心が苦悩で持ち堪えられなくなって、血を見ることで生きていることを確認しているのであり、子どもたちは生きたいのだという。「愛は言葉でなく、側に座り、時に一緒に寝て上げること」だともいう。

そして、出会った大人だけを見て大人って信用できないと思わず、色んな大人のいることを知って欲しい。君たちの味方の大人もたくさんいることを知って欲しい。信じることを恐れず、その出会いのために生きるんだ！と語りかける。

先生は講演先で子どもたちに、友人から悪いことに誘われて時、「ノーと云う勇気を持て！」とも話しかけている。私は、障害児教育においても子どものノーの表情を大事に！（バックナンバーサイト随想等関係（Ｉ）Ｐ：1988.『ノーの保障』参照 ）」と言い続けているだけに、共鳴するところが多い。

子どもは大人（社会）の鏡でもある。子どもに「ノーと云う勇気を！」と云うには、我々大人が大人の世界でその勇気を持っているかどうかか問われてるような気がする。

それにしても、真夜中まで子どもたちに寄り添う先生のすざましいまでの直向きな生き様には、言葉もない……。

（2005 年 3 月 4 日　記）